THE

WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

明治二十一年三月三日刊行

第九十九號

毎土曜日發兌

一册正價五錢

府內無郵送税

東京 女學雜誌社

Mar 3
1888
no. 99

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 99, MARCH 3RD, 1888.

第九十九號

EDITORIAL: — Family Life in Japan: No. IV. (How to Make Homes Happy).
LEADING ARTICLES: — On Costumes (Conclud d) by Prof. M. Oga'a.
CRITICAL NOTICES: — "Tōyō no Kaji" (A Fairie's Complaint); "Ukigumo" (The Floating Cloud).
MISCELLANIES: — Love or Caprice? ; On Conversation ; "Ume", a poem; A Countess' Compliment to the Translator of "Dora Thorne."
NOVELS: — "Last Days of Pompeii" (ices); Bouquet of Novels: No. 1.— Scott's Kenilworth.
BIOGRAPHIES: — Emma willard.
CORRESPONDENCES
CHILDRDN'S COLUMN: —Two Natural Servants.
GENERAL NEWS.

●社説　日本の家族(第四)之を幸福にするの策
●論説　衣服の説(維方正規述)
●批評　東洋の佳人○浮雲
●叢話　はかなき愛(西八條の妓王)○梅一枝○會話の心得○某伯爵夫人より末松謙澄君へ送れる書狀
●小説　奔彪榮華の夢(愛西士の殿堂)○小説神髓第四回
●佳傳　女學率先者エンマウイルラルド夫人の傳
●新報　二十九件
●附錄　小供のはなし第四回(忠義の家來二人)

●珊瑚の珠　(第五十五回)

妬花歌　六如居士

昨夜海棠初着雨。數朶輕盈嬌欲語。佳人曉起出蘭房。
折來對鏡比紅妝。問郎花好奴顏好。郎道不如花窈窕。
佳人見語發嬌嗔。不信死花勝活人。將花揉碎擲郎前。

愛はしね　ふかやぶ

戀しとはたがなづけゝむことならむしぬとぞ只に云べかりける

題しらず　よみ人しらず

須磨のあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたな引にけり

おほそら　さかゐのひとざね

大そらは戀しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

宿荒れぬ　僧正遍照

わが宿は道もなきまで荒にけりつれなき人を待とせし間に

採蓮曲　唐　李白

若耶谿傍採蓮女。笑隔荷花共人語。日照新粧水底明。
風飄香袂空中擧。岸上誰家遊冶郎。三三五五映垂楊。
紫騮嘶入落花去。見此踟躕空斷腸。

曇れる夜　よみ人しらず

月夜にはこぬ人待るかき曇り雨もふらなむわびつゝもねむ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第九十九號
明治二十一年三月三日發兌

社説

○日本の家族

（第四）之を幸福にするの策（上）

日本には幸福なる家族眞に稀れなり多くハ之れ和樂せざる所ろのものにして而して此の和樂せざるホームより起る害毒の如此く莫大なるを聞かば日本の家族は其れ之れを此の儘に放置すべからざる也。

然らば之を放置せず抑も何如樣に之を改良すべきか、吾人思ふに其策もとより多し元來此の弊害の由て來る所ろの甚ハだ遠きものは之を除くにも亦た遠き慮ばかりを爲さゞる可らず尚ほ其の弊害の甚ハだ手近に起るものは之を改むること亦た即時直接の心得一つにして可なるべし若し能く其途に應じてそれ〴〵に改良の策を施さバ其の速かなるは即ち今日より乍ちにして一家の和樂を來すべく假令ひ其の如此く速かならざるものと雖ども尚ほ十年にして一豹變の期なきにあらず日本人民は本來幸福なるホームに入り難き所ろの人種にはあらず豈に容易に落膽して之を改良するの策を放擲すべけん哉。

之を以て日本家族の現況を改良して之に所云る和樂團欒の幸福を持來さんとには其策自からにして二樣あるべし即はち其第一は家內の個々が其心得方を改むる事、其第二は多少現今の家族の仕組を改め且つ多少其仕組に附屬する從來の弊習を破る事是れなり。

つら／＼思ひ見るに日本の家族の興味索然たる者は先づ家內に儒敎主義より出る懸隔の行はるゝを以て其の大根元の一つと爲さゞる可らず、故に當今ホームを幸福にするには先づ第一家內の交際向に支那流を去つて西洋流を取るべし。

蓋し從來家門の道德に於ては父もしくは夫に嚴武の容を主とし母もしくは妻に溫柔の德を大切としたる所ろ其弊や父は甚だ嚴しき顏附をして一家內を睨み付けもし吾なかりせば四方の鼠悉く暴れ出でんと掛念するものゝ如く其愛兒に對する樣躰の如きも眞に冷淡至極にして一向に之を顧慮せざる歟と奇しまるゝ程あり父の嚴武の容すでに如此く極度に走り行くを以て母の溫柔も亦た一方の極度に走り只だ陰に爲て子供をカバヒ表に立つて夫にあやまり爲に或は卑屈と爲り或は柔弱となるの外なし中々に以て能く一家を和らむるの勢力あらざる者なり、思ふに何如なる窮屈の父親と雖ども其の心中には固より溶くる如き愛情なきにあらず然れども彼れ自ら思ふようは吾れもし此の愛情を有の儘に現はすときは嚴武の容乍ち失せて自づから威光少なくなり遂には子供も氣儘を云ひ妻も圖に乘るの患ひあらんとて則ち大和魂を發揮して密に齒を食切り殊更に冷淡の躰を裝ほうの趣きなきにあらず、左なきだに日本從來の惡習として愛情に濃かなるを以て何か男らしからぬ事の樣に考へ涙を飮んでそら笑ひし妻子を蹴て空に嘯ふくを以て幡隨院の長兵衛なりと心得るものあるが故に、一家の主人公たるもの先づ尤ともうちくつろぎたる躰を嫌らひて窮屈にして片苦しき家風を作り出し平常其子に對しては苦々しき顏附を爲し其妻に對してはヨツ／＼しき持て爲しを致すが爲に則ち以て一家に和樂團欒の溫かなる景況を見るを得ざる者なり。

西洋人は食事の時家族打集ひて一の食卓を取廻き可成く面白き話を爲して少か余念なきを禮とす、日本人は食事の時刻に一定なくして親子夫妻別々にするとあり偶ま之を同もにする時も早食の高名に衒して之を早々に仕舞を常とす。西洋人は出るに妻子を伴ふを以て名譽とし主人の獨吟獨行を以て甚だ殺風景の事となせり、日本人は妻と同伴するを恥しきとに思

ひ子と同行するを面倒なりとし寧ろ一瓢を携へて獨り名山の下に嘯を以て甚だ風流の遊なりと思へり近來府下には此弊稍減じたりと雖でも全國の景況を通覽するに滔々として尙然るが如し。又西洋人は其妻を呼ぶに愛妻と云ひ其兒を呼ぶに愛兒と云ひ心に在る所の愛情は悉く之を口にするのみか時としては心にもなき程の愛情をも自由明白に口に言ひあらはし其妻子を愛すると云ふを以て大に名譽あるもの丶如くす、日本人は前にも云へる如く特更に妻子に頓着せざる風を爲して初て英雄豪傑の行ひを得たりと心得喜怒色に形はれず些々たる愛慾に羈されず飄々乎として情界の上に塔立すとあつて專ら支那の英傑を慕の風あり。西洋人と日本人との習慣は常に如此き方角に向つて左右に相反對す凡そ其事の善惡は暫く曰はず一つは家族を愛するを以て誇り一つは家族を顧へりみざるを以て誇り一つは自由愉快氣樂にして一つは掛念窮屈不自由なり其不自由にして掛念窮屈せざる可らざる所ろに和樂の幸福あるは無論なるが故に日本の家族の興味を甘するには先家内の交際向に支那流を去つて西洋流を取を第一とすべし。此の大根本の覺悟すでに定まらは第二には家内の者能く互に忍ぶ所あるを要す。昔し張氏と云へるものあり一門の子孫繁昌して大層の人數と爲れりしが悉く之を手元に引留めて外に出さす其族相集て一村を爲り血緣數十代連綿として斷へず親類の交際甚圓滑にして絕て喧嘩口論せしとなしと云皇帝之を奇しみて召出し問ひ玉ふに和樂の秘訣一つもあるなし只相忍ぶのみと言上して百忍の字を書出せりと云へり、是れ眞に古今不滅の佳話にして一家團欒の極意蓋し之を措くときは不可なり假令い家に姑舅あり尙ほ面白からぬ小姑舅ありと雖も族人能く忍ぶの一字を守るときは破裂すべき不和も其儘にして事の滑かに治まるとあり易の象に忍の字をあらはして云は丶心の上に利き刄あるが如しと云へり若し不平忿怒の心の上に利劍を置き以てよく其の固まりを切斷するときは則ち玆に一家和樂の根底を安んずるに足るべし故にホームを幸にする當の心得の第二要目は即ち忍の一字に在る也。

次に大切なるは家内の規律を正し時間を定め万事成るべく其順序を立て丶物事の不規則に渡るを防ぐに在り凡そ一人一個の經驗を述ぶるに事の規律整然として順序の肅然たるときは心氣自づから爽快に覺えて知らず識らず氣を輕くして相樂しむものあれども之に反し物事トンチンカンに出で丶鷸の嘴の相ひ違ふ如く亦た終日雜然として業の混亂するときは如何な

人と雖も爲に不快に感ぜざるは莫るべし一家に於けるも亦之に同じ家風嚴にして亂るゝことなく規則定まつて渝ることなく銘々の爲す所ろ相矛盾せずして而かも整肅として相ひ協ひ相ひ適合するときには一家和合せざらんとするも和合すべく敢て憂ふるに足らざるもの也、故に可成一家の規律順序を立てゝ相應の規則を設け族人相寄て之を履行するの習ひを爲すべし之れ蓋し家を幸福にする當の心得の第三要目なり。

此外凡そ人と和樂するが爲に必要なる心得方は即はち亦た幸福なる家族を作るが爲に必要する所の心得方にして其間だ殆んど相違する所なきが故に今更めて別々に之を細説せずして可なり然れども其中に就て先づ尤も大切なるものは人を疑はずして正しく行ふに在り凡そ一家の不和は相疑つて陰に相ひ非るに根元す故ゑ銘々可成相信じて心を傍途に迷はさず常に正しく考へて正しく行ふべし昔し鄭の子產は君子も道によつて欺むかるゝ時は欺むかれて尙ほ恨みなしと云へり世俗一般の人に對するときと雖ども尙ほ常に如此き覺悟を以て堂々として道を履むものあり況んや一家內の人は固其大躰に於て利害を共にする所のものあり故に假令ひ吾れ之に欺むかるゝとも將何如程の害を崇ることあらん好し之に損すればとて得する所のものは一家內の仲間なりと悟らんには初めより寧ろ全く心を安んじ只だ信じて毫も疑ふことなく正々として其道を行ひ敢て顧慮せざるに如くはなし若し如此ならば其初めは實に之を惡み之を非りたるものと雖ども遂には反つて之を愛し之を賞めて則ち相ひ和樂するに至らん一家和合の基礎玆に至て固しと云ふべし。次には物事を明白にするに在り凡そ疑は暗らきに生ずるものなれば彼の疑ひある者の一家の和合に不都合なるを知らば則ち先づ此の疑の由て生ずる所の暗らきを去り万事を公明正大にして毫も隱くす所なきを要す、故に一家內の損益成功失敗等は族人悉く之を承知し敢て互に隱す所ろなく万事を打明けて極めて自由明白に相ひ知り合ふを專一とすべし。而かして更らに一つの大切なる心得方は彼の公平と共同との精神是れなり一家の和合は不公平と偏頗とによりて破るゝこと多し故へに若し御馳走ある時は一皿一杯の飲食と雖ども宜しく之を分つべし又若し些少の慶びだもあらば則ち一家擧つて之を賀して宜しく其福ひを分つべし凡そ物公平にして凡そ事悉く之を共同にせば一家和合せざらんと欲するも得ず斯の如くして而して和樂團欒せざるものは殆んど稀れ也。

故に家内の個々若し如此き心得方を以て相ひ接せば庶幾くは從來の不幸福ある景况を改めて以て幸福なる良好のホームを作るを得べきか然れども此は只だ即時直接の改良策にして即ち吾人が云ふ所ろのもの丶尤も卑近なるもの也家族もし今日より如此く心得なば其家族は即ち今日より和樂團欒の喜びを得べし然れども之れ未だ悉く望み得べからざるの事なるが故に吾人は更らに遠計を定めて遠く日本家族の改良策を施さゞる可らざるを知る也。

論説

○衣服のはなし(其二)

緒方正規述　佃與次郎筆記

ソレデ人の温度は只今申しまする通り朝夕に於て極めて聊かゝの差がありますが四十度の躰温なるときは醫者は之を大熱と申します又三十五度の躰温なるときは之を「キヨダツ」と申します故に我々が此一定の躰温を保つとは健康を保つに於て最も大切なるもので則ち是れが本であると云ても誤りはありませぬ又空氣の温度は先刻も述べますする通り寒くても熱くても同じき躰温を保ちますが若しも我々が躰温を造ることが何時も同じであつたならば寒ければ躰温を失ひ熱ければ躰温が上りきるから其増減は我々に無ければなりません即ち我々は寒き時は餘計に躰温を拵らへ熱き時はソレ程に拵らへないのであります。

然らば何に因て躰温が出きるかと云ふに我々の躰中の諸部に於て數多の化學的の作用が起り升化學的の作用とは何かと云ふに即ち酸化作用で薪や炭などが燃るのと少しも異る所はありません我々が一日拵る所の熱の分量は如何にと云ふに日本人は未だ計ては見ませんが歐羅巴にては三百萬の温の一位であります其の温を容易く申せば我々が一日に拵る躰温の熱を以て水を一斗五升だけ零度から百度まで温めるだけであります我々の通常拵へる一日の熱の量と云ふものは西洋蠟燭の一本をマルデ燈して拵へると同じ位のものでありますソコデ又我々の拵へる所の熱の分量と云ふものは何時でも同じでは御座りません食物の種類又食物の量の多少に由て熱の拵へ方が違ひます又運動の多少にもよります故に躰温を拵るの本と云ふは食物を餘計に食すると少しく食すると運動を爲すと爲さゞるとに據て區別があり升。

前から述べ來りました温の平均數即ち一日に拵る所のものが半分も減ずることもあり又半分も増すことがあります然して我々

が左樣の熱を拵るのと云ふものは如何にあるかと云ふに其一部分は我々が器械的の仕事に變ぜしめ又多くの部分は我々の身躰の外部と肺から其熱が逃げて往きます即ち放散するのです又空氣の温度が低くければ熱を澤山に拵へなければならぬ若も冬であるならば食物も夏に比して多量に用ゐ運動も活潑になり其取りたる食物が腹中に於て悉く燃燒しますのです又寒う御座りまする時は我々の皮膚に在る所の血管と云ふものが寒さの爲めに縮みますそれ故其血液は追々少なくなり少なくあつて參れば皮膚は乾き乾きたる皮膚は温を失ふヿが少なく乾いた皮膚で包んで居るから熱を失ふヿが少なくなります又熱き時は何うかと云ふに皮膚の血管と云ふものは大變に廣がつて赤くあるから誰れにも分りますが血液が餘計に滿ちて參ります皮膚は赤色になるのみならず少しく濕ふて居る然して血液が皮膚の方に澤山來て居れば熱を空氣に與へますヿが澤山で御座り升其外熱ければ汗も出ます汗の出る時は熱を用ゐて蒸發します其熱を躰から取りますから矢張ソコを蒸發の爲めに冷やすヿが出きます其外熱き時は我々は重に靜かにして怠惰て參ります其外食物は進みません此の如く我々の皮膚は熱き時も寒き時も働きがありて空氣の寒さ熱さ其變換に抗抵して行くが然らば我々の躰温を裸躰で保つヿが出きるかと云ふに裸躰では保たれません必ず其外の補助を仰がなければならぬが其補助とは即ち第一に衣服で御座り升又室内を煖めるヿなども躰温の保護となるであります。

是れから衣服のヿに就て述べますが着物は今申した通り我々の躰温を保護しなければならぬものであります衣服は土地の氣候風儀又慣習其外土地の濕氣等にも關係を持て居りますし又年齡男女職業貧富の差等に由て異ります然して衣服の目的と云ふものは人の體をして寒氣或は熱氣に堪へしめる爲め容易く申せば寒氣熱氣を妨ぐのが其目的であります吾人が地球上の種々の氣候に住居し得べき武器と云ても宜しいのです併し或人は又衣服あるものは其土地の風儀慣習時の流行に由て用ゐるものだとの説を立た人もありますが重なる目的と云ふものは然うではありません若し我人の皮膚が多くの動物の如く温を導くヿの悪き羽や毛を持て居れば衣服なしにも十分躰温を保護するヿが出きまするがソレが御座いませんから（日本のみならず）衣服なしに永く健康を保つて居ヿは出きません若しも衣服が無いならば凍へ死ぬより外にありません之に由て考れば衣服の目的は健康を保護するに在て風儀や習慣が

重なる目的ではありません。

扨衣服を拵るには如何なる物を用ゆべきか其物質は如何にと云ふに一部は動物から取ります即ち毛皮絹などは動物から採るもので他の一部は植物から取ります即ち麻木綿の類です今其物質に就て熱の性質又熱を導くことなどを論ずれば一般に毛で織りました所の者は麻又木綿よりも熱を傳導する即ち導くことは惡るいです又熱を貯へますることも永く貯へて置きます性質と申すものは其物質に關係するよりも物質の內或は其間に含んで居る所の空氣の多少にかゝはります然して我々の身躰の外側から逃げて往く熱を其中に永く貯へて置けば我々は暖かく覺へ之を速かに放てば寒く覺えるので空氣が其内に澤山含んで居れば詰り暖かいのです而して澤山の空氣を含み又氣孔を持て居りまして緻密でない物質の織物の利益と云ふものは空氣の交換を易らかにすると云ふ大利益があります着物に澤山の穴がありますならば我々の皮膚から出る所の排泄物の他の新らしき空氣との交換が有るので若し我々の着物にして空氣の通らないもので拵らへたならば其身躰は必ず汗で濕ふと湯に入りたると一樣になりますソレが永く續きまする時は遂には血液の滿る爲めに「キンショウ」を起す樣なことになります此時若し寒き空氣に觸れます時は急に熱を失て直に感冒致すことになります一口に言へば風をひくことが多く御座います今其試驗を致して見ませう(實地試驗)。

而して衣服に制する所の織物は其物質の厚ふ御座いまするよりも却て密着せずに間隙があつて離れて居ります方が其目的に適ふので其證據は押詰めました綿は廣がつたりつぶれたりする綿よりも寒いです何ぜと云ふに内に含んで居る空氣が少ないからです同じ蒲團でも一方は古きまゝ一方は日に干せば其暖かさが大層に違ひますト云ふものハ日に干せば綿がふくれて空氣を内に含むからであります。

次に鳥や獸の寒氣を防ぎまするには其皮を以て防ぐのではありません其皮に生じて居る羽或は毛に由て寒を防ぐのです羽や毛に由て防ぐでハありませうが最も重なる所は羽や毛にある所の空氣の多少に關係を持て居り升寒き時に木に止まつて居る鳥を見れば膨れて居ります是れは羽が膨れゝば空氣が其間に含んで寒氣を失ふことも少なく能く暖りますから自然に身を膨らすに至るのですソレカラ植物より製する麻木綿の類などは皮膚に接して汗の出處が毛織物とは少し違ゐがあります毛織物なれば水分を引くことハ木綿などゝ同じとしても其彈

力を失ひません毛織物は濕れても彈力は失はずに終始ッパッテ居るから皮膚から汗を取るにも遲いし其間の空氣は何時も殘て居ります併し木綿や麻にすれば濕れゝば直にベタリと皮膚に附着ますソレ故早く蒸發するから吾人の躰温を早く取て仕舞密着するから寒さも大層に違ひます日本流儀に座ッても何處が寒いかと云ふに膝が一番に寒いト云ものは着物と膝は一番に密着して居るからで御座ります又皮ばかりの手袋がありますが是れは皮膚と密着しますから毛織の手袋やメリヤスの手袋に比して餘程寒いです又着物が雨か雪露などで濕れ中からは汗に由て濕ひます其衣服たるや水分が熱を導くと空氣より强いから其爲めに冷へるのでハなくして重に其濕れたる所の水が蒸發して其蒸發の爲めに温を用ゐるから冷されるのであります縱令ば毛織の靴下にしても濕れて乾くまでは蒸發に由るのでハあるがソレ迄に用ゐる熱と云ふものは一合餘りの水を零度から沸騰點に至らするの熱量であります靴下の濕れたのを穿て居れば熱を奪はれる其量が氷水から沸騰點に至るまでの分量であります。

然らば衣服は暑熱には如何にと云ふに縱令ば大陽の光線に逢ふ時ハ其物質即ち織物は薄く緻密で白き色か稀白色のものが能く熱を防ぎますソコデ大陽の熱は日傘が一番能く防げます前申した通り白き色が一番大陽の熱が防げるとして黑き色は如何にと云ふに其熱を取ると最も强う御座います其次が藍色です赤と綠などハ白と藍との間ぐらゐですソコデ其熱を引とを試驗するに一番簡短なのは同し大きさで同し物質に種々着色したる切れを雪のうへに持て行て駢べますと大陽の熱を取る最も强き黑色ハ一番深く沈みます熱を引くことが熱いから雪が早く溶けるのですソレ故日向に出て居る時は黑の着物が一番暖かであります。

又衣服を以て我々の躰温を保護するに就て尙ほ外に關係を有して居ることがあります即ち水分を取り又之を蒸發さするの遲速であります假令ば麻の衣なら水分を取ると早く又蒸發させて仕舞うとも早い毛織物は之れに反對です麻は早く水分を取早く蒸發させるから蒸發の爲めに熱を用ゐて身躰を冷しますとも一番に强いです今此二つの徳利に麻とフランチルとを以て明かに試驗を施しませう(實地試驗)

此通りの譯ですから麻の着物を着て居る時は風邪に冒さるゝとが多いです故に始終汗が出る職業の人或ハ旅行する時などハフランチルの下着を用ゐるが宜しいで御座ります

然しながら木綿や麻と雖も亦利益あるもので御座います其利益とは下衣に着て居れば我々の皮膚に生じた所の垢即ち汚物を取ることが毛織物より強いです我々の下衣は度々洗濯して交換しなければならぬことであるが今麻と木綿とを比較すれば麻の方が垢を取ることが強し又我々の衣服は內外から汚物を取るもので內からは表皮脂其外排泄によつて着物を垢にし外からは塵其外の汚物が附着しますから清潔にすべきは勿論として時々空氣に晒し又洗濯をせぬと必ず健康に害があります中にも別て下衣にも注意しなければなりません又病人の用ゐました着物夜具等は清潔の上にも注意して消毒法をも行はなければなりません殊に傳染病などの者は消毒を行ッた後でなければ用ゐてはなりません。

着物を染めます色の中にも有害なるものがあります赤き色の即ち唐紅にはハヒサンと云ふものを含んで居りますから之を以て染めたる衣を下衣にすれば皮膚にオデキが出きます帽子の裏に赤き皮を用ゐたるなどが紅唐であるならば額にオデキが出きることもある故注意しなければなりませぬ。

ソレから小供の衣服は何うであらうかと云ふに小供は比較的に熱を失ひますることが大人より多いです故に餘計に着物を用ゆべく又老人は血液が不足になり新陳代謝も薄らぎ運動も少なくなりますから務めて躰温を保つに氣を注けなければなりません氣候の急に變る時も我々の健康には害があります例ば多人數集たる暖き一室を出急に冷かなる外氣に觸ますれば感冒致すことがあり又屢々氣管枝可多留に罹ることが御座います。

又衣服の仕立方は衛生上に如何なるものが適して居るであらふ如何なる點に注意しなければならぬかと云ふに洋服なれば其一部分を強く占めぬ樣にす強く占める時は器官が變じて異形となります例へば洋服の襟の如き強く占めました時は頭よ通ふ血行を妨げ永く其儘にして置けば腦出血を起すの基となります又腹部を強く占めれば呼吸及び血行を妨げるに至ります殊に小供の如き器官の發育して行くものは爲めに種々ある異形に變ずることがあります然らば日本服なれば如何にと云ふに躰温を保つに於ては和洋何れも大差はありません只日本服なれば運動を爲し仕事を致すに不便だから間接に衛生に適はぬと云ふ點もありますが又雨や濕氣などを凌ぐ點に致りましては洋服には遠く及びません今其熱を保つ保たぬを試驗するには爰に是れは茶壺で拵へたのですが湯を入れて湯のさめる時間を計ります此器械で以て其熱を保つと否との試驗を施す

とが出きるで御座います。只今まで述べ來りましたとは衣服の作用を極く手短かに申したので學術上の六ヶ敷ヿなどは悉く省きましたのでありましたが誠に永くては聞苦かつたでおらうと思ひます。

批評

(60)　東洋之佳人　大本一册(和綴十四葉)定價二十錢　發兌所東京久松町原田庄左衛門

此書は東海散士の著なり東洋之佳人とあれば抑も如何なる事や記したる女學の外には頓と目の付かざる記者の如きは先づ日本の佳麗が女權の伸びざるを慷慨するにやあると覗がへし見るに、天女身を現じて田子の浦に散士に訴へ旭姫が徒らに西國の貴公子に迷はされて浮遊飄々として止るなきを慨するものなり。鐵腸君云く散士は當世の屈原なりと評者云く天豈に保安條例無らんやと此書の如き蓋し明治の壯士一篇の獻白文を捧ぐるの類に入るべし、女學記者は之を女學に關係なしと評して姉妹に報ずるに止まる。

〇浮雲第二篇の褒貶　忍月居士

忠義に祿の高下なしとの一言は眞田幸村の口より出でゝ初めて價値ありシルレル氏の戯曲ハクレッフ、プレックの名優を待ッて初めて光彩を增す凡そ天下の事其器に當るの人其能を有するの人之を言ひ之を行ふて一段の佳味あるもの也利欲に迷ふの劣士眞田を學ぶも焉んぞ家康の感歎を受けんや馬脚、捕手を粉するの俳優シルレルの作を演ずるも焉んぞ觀客の評判を招かんや江戸拂云々の廣告をして謹厚の尾崎さんの口に出しめずして團珍をして言しめバ頓知協會の賞言を得るや覺束なし紅毛糸胴着を新駒に贈るの所爲をして深窓貴孃の手に出しめずして裏店の娘ならしめバ新聞紙上の珍話とならざるや明也小說の褒貶亦た此の如きのみ其一褒一貶は小說の眼あり小說の能ある人の筆に出て初て效力あるもの也今や此の眼なく此の能なきの予妄りに一言を大評判あり大榮擧ある浮雲に加へんと欲す縱令力を極めて之を賞するも浮雲の價値を揚ぐる能はざるは勿論なり又縱令筆を奮つて之を貶するも浮雲の瑕瑾を發くに足らざるは覺悟する所なり然れとも余は客年の夏浮雲の第一篇を批評せり所謂乘り掛ッた船今更第二篇を默々に附するは吾心の許さざる所否な女學雜誌の許さゝる所なり故に終に一言を加ふることゝなせり。

浮雲は名にし負ふ八方睨の若隱居春の屋主人と二葉亭主人の合著に成るものなれバ其の好著たるは卷を播かずして先づ推

測り得可し然れども一度之を讀み終れば應さに「マサカ此程までに善く出來てゐやう」とはの感歎を發して其推測は遙かに浮雲の眞價の下に在るを悟る可し嗚呼維新以來小説多しと雖も浮雲に及ぶものはあらざるべし予は浮雲を以て明治年間無比絶群の一大傑作と尊稱せんと欲す然れども余は家康の感歎を受けシルレルに光彩を添ふるが如きの器能ある者なれば余の尊稱は浮雲に寸効なかる可し亦た著者も難有とも何ンとも思はざる可し斯ふ斷ッて置けば誰れも亦た予を目して阿諛の批評家とも思はざる可し。

浮雲の傑作たる所以は其人物の性質意想行爲一々眞に逼ッて古人今人未だ曾て穿たざる極細極微の點を描くに在り一境遇の變轉に隨ッて一瞬間の感情を寫すに在り試みに其地位其場合に逢遇したる經驗ある人をして此書を讀ましめば正さに吾心中を洞覽したるには非ずや吾が行爲を探知せしには非ずやと感驚交々至り腹をくすぐらるゝの懷ひある可し是所謂痒處を搔着するの小説にして眞正の人情を探究したるもの浮雲を措て何か有らん報知記者は口も亦た言ふ能はざるの妙ありと言へり予は猶一層進んで十年其人に接するも猶解得し得ざるの機微を描くと言はんと欲す是等の點を的寫せるの妙は浮雲第一篇に優る有るを覺ふ讀者幸ひ女學雜誌第七十四第七十六第七十九第八十の四號を再讀せば亦た第二篇の如何を伺ふに足る可し故に余れ此點の批評を省畧して外に猶大感服大褒賞す可きの箇條を列擧せんと欲す。

第一、浮雲中の人物の行爲は終始一致貫通せり、夫れ小説は社會の現象を材料とし人の行爲を以て理想上の一世界を構造する者なれば篇中に現出する人物の行爲は終始其人の性質と並行し一擧一動と雖も其人となりに抵觸齟齬す可からず數多の小説を見るに一人の行爲時々其人となりと相違し同一の人にして數人異樣の運動をなすかと疑はしむ浮雲は然らず昨日の文三は矢張り今日も文三今日の昇は矢張明日も昇なり眞に浮雲を讀むときは宛然其人に接し其人を觀るの想あらしむ斯の如く論ぜば彼のベーローの末流を汲む者は予を難して曰はん世人は依然たる呉下の阿蒙にはあらざる也三年相見ざれば應さに刮目す可き者多し昨日の乞食今日の大臣たるを保せず明日の親方亦た明後日の旦那樣たるも計り難し然らば粗暴家時として緻密家ともなる可し滑稽家時として寡言家ともある可し况んや一人物にして義務者とあり權利者となるの時に於てをや或は卑屈となり或は活潑となり或は澁滯となり或

は尊大となる是を以て之を見れば行爲は一に時日と塲所とに一致せざる可からざる也終始行爲をして貫通せしむるは謬誤の甚しきものなりと嗚呼之れ果して何の言ぞ行爲の如何は一に性質の如何に存す性質は豹變する者に非ず然らば行爲は終始同臭味を帶びざる可からず彼の時日と塲所とは即ち人物の榮枯窮達あり榮枯窮達に由ッて行爲に異狀の觀あるは行爲の變轉せしに非ずして只化動推歩せし者あり語を變へて言へば只表面皮想上彼此の差別あるが如く見ゆるのみ若し夫れ時日と塲所との一致を要するとせば著作は總て流暢快活の妙味を失ふ可し况んや浮雲は僅々五日間の經歴を寫すに於てをや焉ンぞ行爲に差異あつて可ならんや嗚呼前後二編數百頁の長に亘り其行爲の終始貫通すると恰も富山の東西南北乾坤巽艮より望んで同一形を呈するが如きは予が大に敬服する所なり。

第二、浮雲は言語と所思とを必ずしも一致せしめざるあり、數多の著者は人物と行爲の一致を濫用して併せて其言語と所思とをも一致併行せしむる者鮮からず人凡そ此活動せる塵界に寄生する以上は其心裡に懷ふ所は千種万類奇々怪々劣情あり利欲ありて一々之れをさらけ出す時は世間恐くは尊嚴を保つの人はあらざる可し司馬温公獨り鼻を天狗にして曰く「吾は未だ曾て人よ語る可からざるのとを思はず」と予は此手前味噌を以て容易に信ずる者に非らず、よしや之を信なりとするも即ち例外にして千人が九百九十九人までは皆な所思は言語の如く奇麗雅純なる者にあらざる也浮雲は此二者の相關を描く妙技を盡せり例へは篇中昇、文三の言語所思の如きは再三披讀飽を知らず四讀五讀其巧妙に驚かずんばあらず殊に篇中の達小山なるお勢の言語所思の如きは最も穿ち得て妙なり例へば三十二頁の「彼樣な事言ッて虚言ですよ慈母さんが小遣ひをやりたがるのよオホ……」と言ふが如き又百五十頁に「慈母さんまで其樣な事を言ッてそんならモウ是から本田さんが來たッて口もきかないから宜い、イヽエモウ口もきかない〱」とすねるが如きは其適例にして一句千金君寶さんの外は誰れでも成る程と稱歎せざる者はあらざる可し。

叢話

○はかなき愛（西八條の妓王）

此の定めなき憂き世にながらへては心を慰さめんもの只だ愛にてぞあるべし人を愛すればこそ何如なる艱難辛苦をも厭はで思ひ切に樂しみつゝ事をもするなれ又た吾を愛する

の人あればこそ斯る無情慘澹なるあじきなき世にもながらへて春宵秋夜の限りなき恨みを霽らすことを得るあり而して愛の品數多き中にも彼の夫婦相ひ思ふの愛の如きハ其の樂しみの分きて尤も深きものあり互ひに其志を知り其の情を知り多少の片寄りたる僻をも知るか中に倘又餘人の決して窺ひ知らざる極美極麗の其の氣質をも承知し互みに其の人と爲りを慕ひ其の靈性を愛し恰も一心同躰と爲つて相ひ思ひ相ひ和せんには人世の幸福之に過たるはあらざるべし天の此世に男女を造り一夫一婦相結んで清潔の伉儷を爲すべしとの律法は蓋し吾等に此の幸福を與へんとの御惠みにてあるへし、然るに憫れむべき哉世のたわれたる男こ女等互ひに卑しむべき情慾の奴と爲つて最とも墓なき煩惱の鬼と爲り啻に外面の裝ほひを慕つて內心の清きを求めず其の互みに愛する所ろは他の鼻にあり他の目元にあり彼の綠髮ふさ〱として風にたゞよふの趣きにあり左れば好顏去つて面にさゞなみを催うすとき風波の爭ひなきは固より稀れあり苟くも春花落つるときは秋風乍まちにして起り昨日の朝々暮々の情暮去り朝た來つて則ち跡なし嗚呼如此きの人は夫れ將た何を樂しんでか世に存らふるぞ傳へ云ふ東都豪富の家々に妻妾ありて櫻桃共に爛熳芙蓉の面いよ〱白く柳眉いよ〱淸く主公案に據つて佳麗傍らを周ぐると抑も是れ樂しきか吾れ思ふて此類の人を想ひ轉た嗟歎の感に堪へず汝ぢの金汝ぢの權よく幾千の美人を買ふべし然れども能く美人心中の心を買ふを得るか美人よ汝ぢの面は麗なり汝ぢの服は淸らかあり然れども汝ぢ果して誠實ある男子の誠實を知るか彼は佳人の面を愛し此は郞君の富を愛す嗚呼人世斯の如くにして能く樂しきを得る乎。

昔し入道相國妓王の美を愛せり母は之が爲めに百貫百石を得京中の娘兒皆な猜忌せり身は是れ當世第一の人蓋し淨海を動かすもの只だ其の纖手よあるのみ然れども三年の後ち加賀の國より佛御前參りたり年十六にして高手の白拍子自から信じて壓して西八條に推參す入道大に怒つて申すよう左樣の者は召にてこそ參るあれ何條推參するようやある遮莫ばあれ何處の神何如の佛下向すとも吾れに妓王あらバ亦た何をか求めん夙早々よ追返せと云ふ妓王傍らより乞ひ奉つる偶ま思立つて參り候をすげなく仰せられ返し玉ふぞ不便ある我と同じ道立るとあれば人の上とも覺へ侍らず假令舞歌ふは御覽あくとも御對面バかりにて返し玉へとあり入道則ち引き入て遙かに之を見冷淡鷹揚あざけりて遠く打ち見やり何如に佛わ

れ今日汝ぢに見參は有まじかりつれども妓王が何思ふらん懇望によりて斯くは對面すいかで一聲きかん今やう一つうたひ候へと仰せらる佛御前かしこまりて、

君を始めて見る時は千代も經ぬべし姫小松御前の池なる龜岡に鶴こそ群れゐて遊ぶめれ。

鶴こそ群れゐて遊ぶめれと三返うたひすましたり入道面白きとに思ひ汝ぢ今樣は上手なるぞ舞も定めて能らん一さし舞ひ候へとある佛は美目淸眉立つて衣をたゝよはす時瓢々として天津乙女の戯むるゝが如く屈して玉躰をひねる時纎々として天女の下り遊ぶが如したう〳〵たる鼓の音はつし〳〵の足拍子音節投合して觀る人々を夢に迷はせたり入道際りなく愛でて忽焉として佛に全心をうつし早や暇ま乞はんと申すに絕へて返し玉はず重ねて又た見參し奉らんと云ふに切に止めて離ち玉はず妓王殿の前も面伏なり早々に免し玉はれと云ふに左らば妓王をこそ追出さめ今日より汝ぢ淨海の傍はらを去る勿れと仰せあり妓王はとく〳〵罷り出でよと使三度まで重なりて之を促されぬ兼ねて思ひ儲けたる道なれどもさすがに昨日今日とは思はざりしものを榮華またゝく間に去つて秋風蕭條たり三年が程栖馴れし名殘の惜まれて無らん跡の形見にとて泣く〳〵障子に書付ける一首の歌、

もへ出るも枯るも同じ野邊の草いづれか秋にあはで果べき

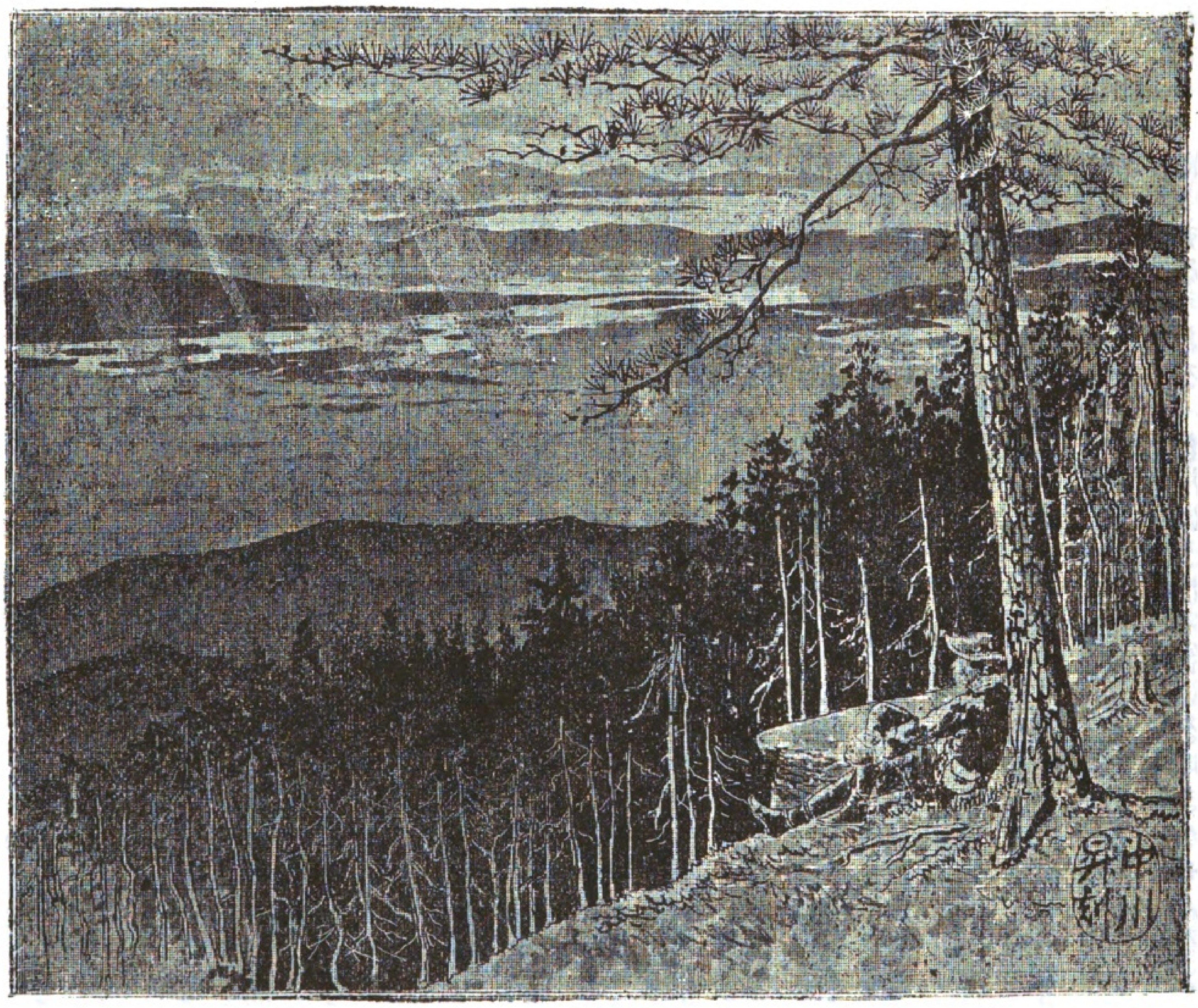
扨て車に乘りて家に歸れば洛中の上下傳へ聞て西八條より暇ま給はりしとかや吾れ見參して遊ばんと使の來ること頻々たり妓王今さら人に面てを合はすべきかはとて只だ歎きになげきて引かつぎ家にのみ隱れたるが年は暮れて春回へり來り陽氣うらゝかにして日尤も長し入道は佛のつれ〴〵を慰さめんとて使ひを妓王の許に送り其後は何事かある春の日の樂しみに汝ぢの歌ひ舞ひ佛にも見せたく思ふ早々に參れとある妓王は餘まりの墓なさに御答へもせず只だ泪に沈みて歎きたるが淨海殿の御意に逆らはんと命ぢにも危うしたゝ忍びて參りてよと母の望のまに〳〵衣かろく裝うすく妹と白拍子二人を連れて見參す遙か下りてしつらひたる座敷に置れて泣々もそと見上れば入道佛の膝に掎りて遠く打ち見やり何如に妓王久しかりつるぞよ早く歌ひ舞ひして佛がつれ〴〵を慰めよとある妓王は口惜しさと悲しさとを舞ひの袖に引くはへて靜かに立ち上りつゝ、

佛も昔しは凡夫なり我らもつひには佛なりいづれも佛性具せる身を隔つるのみこそ悲しけれ。

梅一枝

しのぶ

ふゆがれの　さびしさきりて
みわたせば　いろかはりけり
くももかすみぬ。
いまさける　むめのひとねだ
みてあれば　しべもはなびら
あゝうるはしな。
こゝろなく　つれなきふゆを
しのぎきて　かくまでさくや
このむめのはな。
こたへなく　ものも得いはで
しづまれど　こゝろなくして。
いかでさくべき。
はるのひの　たちかへりくる
うれしさよ　このはな見るも
かみのみめぐみ。



隔つるのみこそ悲しけれと聲をしぼりて二度び歌ひつゝ漸やくにして舞ひたりける」嗚呼今の煩悩の男女其の交情多くは是のみ而して之に甘んずるの女性あらんか吾れ其の姉妹に告ぐ君遂に妓王たらざらんと欲するも得ざる也。

○會話の心得

一。凡そ僞りあらんと思ふ事を眞らしく話す可らず、抑も虚言を言ふ事は第一。に眞を話せと命じて吾々に舌を與へたまひたる神に對しての大罪なり第二。。に世の人々に對して限りなき不信切の大罪なり竝は人々もし眞とを語るとを覺悟せずバ人と人との間だに安らかなる交際を見るを得ざるべき也第三。。に其當人の品格を卑しくし自身を傷くる所の大罪となる竝は毎度虚言を言ふとを頓着せざるものは遂には用もなきに心なく虚言を言ひ常に眞とを断言するとを得ざるに至るもの也。

二。虚言を禁ずるは無論なり倘ほ虚言に近き曖昧の言語を一切用ゆ可らず又た人の風評もしくは一己の想像了見等よ出でたる話を甚だ確しか氣に語る可らず。

三。成べく言語を愼しみて語數を少くすべし人の話によりて多くの智識は得らるべきものなるに自分のみ辨ずる人は喩へば噴火山の如く吐き出すのみにて利益を受ると無く倘ほ長上に對てしは失敬となり自身の爲めには人に卑しまるゝの損あるべし。

四。凡そ語ばは餘り熱心に餘り聲高かに餘り粗暴よておきよう注意すべし人と論つらふ時と雖ども道理に因て人を服し沈默せしむるは宜ろし聲高暴言等よよつて人を沈默せしむるとも決して賞むべき所なかるべし。

五。人の話を途中にて止め其腰を折る可らず十分に聞けバ十分に意味が分かり又十分ある返辭を爲すの便あるべし。

六。凡そ言に出す前には先づ能く其言ふべき事柄を考へ次に其事柄を言現はすべき言葉を撰み而して後ち静かに發言すべし斯せバ言語一々其要に當り且つ皆な宜しきを得て絶て人を怒らするようの事あるまじ彼の話しかけたる後に於て自から考ふる如き粗暴の事は貴婦人にあるまじき者也。

七。人は各まさる所ろあり何如なるものにても大抵はそれぞれに達する所の長所あるべし成べく其話を聞くようにすれば先方も喜んで之を話すべく自分も利益ある話を聞いて大に得する所あるべし常に己れの智識を申きかせんなどの心得ありては會話自から驕ぶりて人を怒らせ身の貞徳を損す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るものなり。

八。面あたりお追從を言ふもの若しくは己れの親しきものへ對し特更らに己れの事を賞むるものには分けて注意すべし此如き人は彼の烏の聲を賞め立てゝ之に鳴かせ其口中に在る食物を奪ひ取りたる狐の如きものなり斯る人物と話しするときは何事も扣へ目にして靜かに致すべし。

九。人の惡しき事を言ふ可らず但し餘人の名譽を保護し正理を伸さんとする時ハ此限りにあらず其外の時に人の惡評を爲すは悉く惡しきと也。

十。自身と己れの事を賞むるは尤も愚かしきと也盖は自から賞めざれば成らぬ程に人より賞められたるとなきか又は自から賞めざれば成らぬ程に自分の名譽が落んとするか此の二つの事は共に喜ぶべきにあらず故に自身と賞むるは尤も愚かしきとを人に示すとにて其上にも人を不愉快にすると少からずゆめ／＼つゝしむべきもの也。

〇谷間の姫百合　（某伯爵夫人末松謙澄君に贈るの書）

末松靑萍君此頃谷間の姫百合と云へる西洋小說の譯あり左は即ち同君より該書を贈りまゐらせし或る伯爵夫人が禮狀の寫しあり眞率にして面白く出來たれば玆に掲ぐ尙ほ谷間の姫百合に付ては次號に批評すべし

折から昨夜よりの雪にて又々寒ささへかへり候樣覺へ候處御障りものふ渡らせられ候哉と深く御あんし申上候　扨昨日ハ御文幷に御書物わざ／＼御使にて御贈り頂き御親切の程御嬉しくくり返し御禮申上候いつもながら此節ハとりわけ御公用御忙しく入せられ候よし何卒御保養專一に御わづらひ遊さぬよふ時々ハ梅見になり共御越遊ばし御心をなぐさめ御頭りのあやみ御忘れ遊ハし候樣夫のみ祈り居申入候又私事も過る日より病氣にて引籠り御尋頂き候節も御面會申さす誠に殘念に存上候さりながら昨今ハ餘程氣分もよろしく此よふすならバ近日全快いたし申べく其折御目に掛りゆる／＼御物語御遊ひ申べくと樂しみ養生いたし申居候必らす御あんじ被下間敷且又昨日いたゝき候谷間の姫百合早速よんでもらひ只今二回迄見終り餘り面白く候まゝ早く御禮申上度さ代筆にて失禮ながら御返事申入候　是迄見かけ候小說も面白く候へ共此御本ハ別段私の心にかんじたる事のみにてさきほどよんで頂き度夕方迄にハ三回も見終り申へく左すれハ早く先の紙數のすくなくなるのが又惜しく見たさも見たし樂しみ中の思案に呉れ申候深き御文章の御趣

向などは淺はかな私の心に汲とり兼候へ共庭のけしき槐もあれば栗もあり又垂楊の半面を蔽ひたる池の中に白き蓮の花の睡れる如き處見れば見る程其けしき心に浮ひ知らぬ國の詠めとは思ひ參らせすそして有洲伯は辭を和らげその書出し誠にめづらしく拜見いたしとふゆふ人があらはれますかと怖〳〵ながら承り候處時しも秋の初にて此物觀塲のあたりより一しほ面白さ心に感し御かげにて病氣のくるしみもわすれ是を御藥に早く全快いたしわからぬ處を御講義うけたまはり參らせ度今より御ねかひ申上置候御禮迄目出度〳〵かしく

尚々此御本四五冊頂き度とちらにてもとめ候方よろしく候哉乍恐〇〇様御皈宅の節御傳言被下候はゝ誠にありがたく存上候

小說

〇奔彪榮華の夢

"*Last Days of Pompeii.*"

英國　笠頓先生　原著
日本　青笠小史　譯述

第六章　愛西士の殿堂

埃及人なる亞伯設西は虞朗加士、苦弄日亞士の兩人に別れて海岸を唯一人逍遙したるが忽ち歩みを停め沖に向ひて其の靜穩ある波の上に下午の日光の映ずる樣を打凝視つゝ何か心に思ふ所ある躰なりしが頓て叉ぬきたる手を解き黑き顏に苦ゝしき笑を含みて「噫愚鈍なる奴等かな、馬鹿正直ある奴等かな、阿呆…呆れ切たる呆氣共かな、汝等が如きは事業をするにせよ遊樂をするにせよ又商賣をし信心を爲るにもせよ凡そ自ら制遏せねば成らぬ所の情欲といふ敵に打克れ今は自身甘んじて其敵の奴隸とは成り果たるよな、されば我等は汝等を憎む…否憎べき宿寃が無きにもせよ汝等を嫌惡は當然なり、否ゝ憎惡べき宿寃の無きにも非らず汝等希臘人にせよ羅馬人にせよ汝等に生氣を與ふる所の光明をば何れの所より盜み來りしと思ふぞ即ち皆我が埃及の暗黑ある庫の中より取去たる物に非ずや（希臘羅馬の文化は悉く埃及に胚胎す）汝等の智識…汝等の詩歌…汝等の律法…汝等の技術…汝等の軍事に於る勇猛なる熟練等皆汝等が彼の奴隸が饗宴の皿肉を竊むが如くに竊み取たるものに非ずや、然るに其の盜賊の子孫たる汝等が却つて其の恩人たる我ゝの國の支配者とあり彼の三尖塔をして剌莫西人種（埃及人）の廣大なる基石たらしめず倒つて那の貪婪饜く無きの賊鷲（鷲ハ羅馬の徽號）

が那兒（河名）の美麗なる小蛇（蛇は埃及の徽號）を啄み居れり……咄、彼等は實に我々の支配人で……併し我々のでは有るが自己の支配者では無いぞや（埃及人總躰をこそ支配すれ余一人は決して之に支配せらるゝ者に非ずとの意）余の靈魂は其の智力を以て……今に見よ汝等を支配し制馭すべし其の手械足械は好し未だ見えずとも終には彼等を縛すべし、凡そ智力の腕力を支配する間は、又我が宗教内に彼の人間を迷はす巫女の穴より出る間は（埃及の巫女は穴に棲て人の吉凶禍福を占ふ此時世には最も勢力ありし者あり）智者が此世の帝國の權を握るは當然なり、見よ汝等愚者が害惡と思ひ不愉快と感ずる物（蓋し勉强忍耐）の中よりして此の智者たる亞伯設西は我が幸福を淘汰し來し娯樂を發見し出すに非ずや、（獨立の富裕）然れども此の快樂は哀むべし汝等如き俗物には迚も見得ると叶ふまじ、縱又た之を見得るとも汝等如き呆漢の想像の感情なき軟弱なる料見の躰には之を受け得ると叶ふまじ、而して此の快樂は實に造化が此の人間に與へたる有ゆる快樂の中に於て最も高尚に最も樂しく實に廣大無邊不盡不滅の物であるぞ（遙に後邊の廣朗加士、苦弄日亞士の兩人を振顧りて）サア汝等精神なく躰力なきの愚人原此快樂は何で有るか當てゝ見よ、知れまい〳〵……實に彼の蠢虫奴らの慾の小さゝ僅の卑しき官吏税吏を熱望して蚊の頭程なる權力に涎を垂らし人を傷つけ己を苦しむるとは眞に笑ふべく憫れむべき奴輩あらずや、余が權力は人の余を信ずる所の何所に迄も行はるべし（人若し余を信ぜば即ち其處に余の權力ありとの意）余は彼の紫衣を着たる有權者をも制馭すべし、西伯の都（埃及の）は倒れ埃及は唯名のみに成るとも此の世界には猶亞伯設西の臣下とある者が澤山に有る……

斯く亞伯設西は獨り大言を吐きながら海岸より路を轉じ緩歩して府内に入り頃日殿堂を新建したる埃及の女神愛西士の祠近くへ進みたり

抑も此の愛西士の殿堂は今より十六年以前の大地震に搖倒されて此の女神の愛嬌も久しく草叢の裏に埋れ居たるを甲乙の信心者相集りて頃日再建に着手し既に落成て其の壯嚴昔日にも超たれば此の奔彪府内の人々は爭ひて參詣し香を燒き福を祈る者間斷なく近頃神仲間にて勢ひある流行女となり玉へり然れども亦此御神の巫覡の告る詫宣は自餘の神々のとは事異りて埒も無き囈語の中にも亦綴褄の合ふことあり殊に不思議に其の詫宣の遇中に中るなれば世の耳を信じて目を卑しむ愚

痴無智の輩などは處世の指揮者、竈元、の大神さん、家內和合商買繁昌は唯此神の命令に從ふに在るのみと尊崇して彌々流行の勢威を加へたり、さる程に亞伯設西ハ我が故國の神愛西士の新建の祠に詣らんとて門前の群集を押分け巴里亞產の大理石もて造りたる七級の石階を上りて祠に入れば內陣には長方形の柱礎ありて其頂上に愛西士の女神と今一個の沈默穩和の神と云ふ阿剌西の神像を立たせたり又其前には女神の愛し玉ふといふ柘榴の花を幾基ともなく飾り附ぬ夫より四方の壁を見るに此の女神の親類と云ふ爺の神媼の神姉の神妹の神抜加士の神を初め希臘より神籍を此地に移したる塞弗利亞の威那西女神が其の浴塲より上る處又た人の身にて犬の頭ある亞丑尾の神牡牛の化現なる亞非西の神等其他八百万の神々の像を神集へに集へ神造りに造り爲して此殿內を飾りたり

（第一篇）

○小說神髓

蘇格氏著ケチルチルス　（第四回）

然るに其夜人の寢沈まりたる比ろ家の主人ひそやかにトレッセリアンの伏戶に至り之を揺り起して申すようは彼のマイクと云へるは私の甥にてはあれど生來の放蕩者にて其上惡事に抜目なきものゆえ願くは死するとも復たび玆に歸り來らざるようにと祈り居たる處ろ今日不思議にも戾り來りおなたと御一處にあの舊る家へ參りてよりは何故にや連りにおなたの御樣子に注意し其上へ家のもの等へ色々と尋ね候風なり彼れ元來の惡者なるに况して彼のフォスターなどと云へる老狸と一處に成りては如何なる事をたくらみ申すやも計られず御身の上に万一の事の候ては第一お客さまに對しての責の大ひなるのみか彼が叔父として實に申分けなき次第ゆて候何卒早々に此處を逃れて彼等が毒の穽に陷り玉はぬように成されたしと云ふ、トレッセリアン聞了りて御注意謝する所にてはあれども彼等何如ほどの事をか爲し得んや然し左樣に御信切に申さるゝとゆえ明朝發足して都に上り申すべしと云ふなか〱明朝まで御猶豫ありては亦何如なる事の出で來んも計りがたし早や馬の用意いたし置たれば此に打乘りて今夜の內にそと落延び間道を通りて逃れ玉へと云ひ眞心見えて急がハしく促がすにぞトレッセリアンも遂に之を承引して早速に旅裝し深夜四面の暗黑なるとき彼の驛馬に跨がつて獨り手綱をおやどり露ふみ分けて落行きたり。

此時トレッセリアンは手短かに彼のラブサートの緣故を宿の主人に話し聞かせ事躰如斯き因緣あれば何如にもして之を助

けたしと思へども今ま我が獨力にて之を爲さんと少し覺束なきに似たり吾は之れより都に上りて女皇陛下に奏上し公けの力を以て彼の惡人どもを捕らふるか又はパーチーの主人レスター侯に迫りて事穩便に取計らハせ申すべきか二つの中一つの計によりて兎も角も之を救ふべし然し其間だ彼處に何如ようの事の起らんも知る可らざるに付御邊何卒よく〳〵之に注意し好機會あらバ一臂の力を惜しみ玉ふな好し然らずとも何卒其事由を細かに書いて余に報道の勞を垂れ玉へと委頼し斯て馬を早やめゆき〳〵て明け方近き比ろトある田舍の近邊に達しぬ此時馬の沓に痛みを生じて之を御するに忍びず殆んど困うじ果てゝ漸く其の田舍の或る家に入り此邊りに沓直ほしするものハなきやと問ひたり此處ろに下宿すと見へたるエセ學者徒らに羅甸語の話しなどを仕掛けて頓みに答へず推して之を問ふに無しと答ふ何の愚々しきと哉夫にしても若し實に之れなしとならば前途の旅行を何如にせんと嗟歎するに彼の學者大層に哀れ氣に打ながめ夫れでは彼處の山奥に魔法遣ひの沓なほしが居ると云ふと寧そ其方へ行ては何如んと云ふ魔法遣ひにても何にても宜ろし沓が直ほれば滿足のみ扨て其の處は何方ぞと尋ぬるに中々の途にて十分にハ分りがたしリチヤード案内をして上ては何如と云ふ應と答へて出で來れるは此の家のワンパク子僧にして骨格逞ましき少年なり好し御案内申さんと云ひて出でに掛るを家の老母あわてゝ引とめ何うして〳〵あの樣な魔法遣ひの所ろに行かるゝものか旦那命ちが惜しう御座らねバ御自身にて行き玉へ彼處の山の向うなりと評判に聞ました丈け私の倅は中々お伴はさせられませぬと云ふにトレッセリアンも左らば致方なし試みよ獨りにて參り見んとて立ち出で馬を牽て行きかゝる凡そ一二町も來れりと覺ゆる比ろアトより追掛けて來るは彼のワンパク子僧なり母親のスキを窺がつて脫けて來り旦那私しが御案内しませう迚もお一人にては分りますまいと云つて附いて來る遙か家の方に當ては老母しきりに氣を揉み聲を搾りてわめき止むれども何の八釜しひと云へる顏附にて優々として隨ひ來れるぞ末恐ろしき少年なりけり。

途すがら樣々の事を話し乍ら旦那私しも此樣な田舍に朽ち果つる積りは御座いません何れあとより都に上りまする折の供べし何卒お見棄て下さるな等言ひけるうち早くも彼の魔法遣ひの居れりと云ふ邊りに來りぬ、リチャード急にトレッセリアンの袖を引き止めわれ〳〵向ふに見ゆるが即はち其處に候

かの魔法遣ひは中々のものにて餘程恐ろしひと申しますれば決して之に近づいては成りませぬ彼處の石に環がありますれば之に馬を繋ぎ置いて三度び口笛を吹き其傍らの平らなる石の上ゑ沓なほし料を紙に包みて載せ置き此方の木影に至りて凡そ十分間もぢつとして居りまするとコツ〳〵と云ふ音が致します夫より百遍ほど何かの唱へ言をして夫より靜かに彼處に參つて見ますれば沓はチヤンと直り金は無くなつて居ります夢々之ゑ反くときは神罰的面にして恐ろしき苦みを受くるとゆへ旦那も其樣に成されませと云ふ。トレツセリアンも不思議に思ひ乍ら先づ沓を直ほすが當の用事なれば即はち言ふが儘に馬を繋ぎ金を載せ口笛を三度吹いて置いて此方の森に至りて待つとき成程不思議ある哉暫らくにしてコツ〳〵と云ふ音が仕たりトレツセリアン今はいよ〳〵奇怪に堪へず突と立ち上つて魔法遣ひの欺きを破り呉れん金を少さかにてもタヾで取らすべきかといきまき乍ら行んとす子僧は旦那危うい〳〵今少しれ待なされと云ふをも聞かず引止むる手先を拂つて一刀を拔きかざし彼方を差して馳せ行きたり。

"Only a Mottur can respect a Child's personality sufficiently. All others regard the Child sor its Manifested qualities "Miss Peabody.

佳傳

○女子教育の卒先者エンマ、ウイルラルド夫人の事業 Emma Willard.

女子教育の卒先者を以て聞こゆエンマ、ウイルラルド夫人は今を去る凡そ七十年の昔世に先つて女子教育の必用を感し鞠躬經營多年の企圖漸く熟して一千八百十八年始めてこれを世に公言せしに時のニユーヨルク州の知事クリントン氏は大に其擧を翼贊しウオターフオルドの中學と合併すべき旨を傳へ剩さへ男子の中學に與ふる同じ保護を與ふべしと申けれは夫人及びウイルラルド氏は感佩に堪へずしてニユーヨルク州ウオターフオルドに於て新に校を開きたりこれ一千八百十九年の春花將に開かんとするの時ありき然るにツロイの市民は此擧に感激して廣大の地面を寄附し更に壯大なる學校を立ん事を申請ひしに固よりウオターフオルドの學校は假設立にして其地面も借地なれば其期滿つるの後ツロイに移り玆處に始めて校の基を置きぬ年はこれ一千八百二十一年にして校はこれ今ツロイ、セミナリーなり是より夫人は愈熱心に愈勤勉に校務に盡力せしかば生徒の數も月を逐ひて增加し教授の課目も日と共に進み既に高等數學代數學幾何學三角術曲線法等の學科さへも教授するに至り一千八百五十一年ウオルヴフエーアに於

て賞牌を戴き恭くも皇子アルボルト殿下の玉璽さへも頂くの榮を得たるぞ其校の面目これに過ぎたることはあらじ然かるに不幸にも一千八百二十五年ウィルラルド君病の爲に逝きぬこれ其校に取りて非常の損害にして夫人の哀傷嘸やあるらんと思ひやるに餘あるに夫人は少しも屈する色なく愈勇を鼓して組織を改良し自ら會計の任を兼ね凡ての事務を總理し學生の便益學校の利得一も殘すことなくこれを採用し以て米國女子敎育の原機となり原源となりて女子敎育の進路を開き女子大學の基を起しサウス、ハットリー、オベリン、アンチヲク、及びバサー等の諸大學とはなしぬ斯くの如く夫人の大業已に内に好果を結びしに女子を思ふ夫人の愛情は啻に一區域に止らで全世界の姉妹と共に眞正の幸福を頒たんとて僅かに閑を得て行遊の途に就きしにグリースに在る女子の地位零落の趣を聞きこれを救はんとの愛情禁し難く遂にこれが爲めにアデンスに一の學校を起さん爲めツロイに一の會社を結べり歸りて後校を其子ジョン、エチ、ウィルラルド氏に讓りしが氏は頗る其任に適するの人と云ふ殊ヱ氏が夫人は此校に敎へられて又此校に敎へ且つ此校に副長となり都合十九年の經驗を積みし人なりければ其任に適する申す迄もなし。

夫人性勤勉にして頗る學を好む嘗て校務多端一身に責め來りて更に餘時なきの時にありても何時を設けて身の勉學に費やし熱心道を樂みて學を攻めドクトル、ウイリアム、ハルベーの血液循環説の書中に說く一の誤謬を發見し一千八百四十六年自ら血液循環の原力と題する一書を顯わしてこれに反對せしに當時醫學者流の好評を博し成功ある發見者と賞せられたり校を讓るの後歲邁けし時も尙ほ日に十二時間乃至十四時間を勉學に費やし敎育の新法を考案しコンチチカット州及びニユーヨルク州に在敎育を指揮し女學の進步女權の擴張を計ると前日よりも更に甚しかりけりと云ふツモ纖弱なる身を以て斯の如く勤勉す何によりて衰弱せざる快爽なる心情と活潑なる腦漿は夫人の常に慕ふ所にして又自ら有する所のものありき何に依りてこれを得たる若し夫人が日々の行爲を見ばさのみ驚くべきにあらざるを發見せん早起新鮮の空氣を呼ひて活潑の運動をなし十分の鋭氣を買ひて勉學に係る既に勉學を始めば一心亂れず學惟れ攻む凡そ二時を經て身力少々疲るゝとき戶外に出てゝ適宜の運動に疲勞を醫し復勉學に係るこれ夫人か日々の規則なりき然は五十才にしてツロイ、セミナリーを起し六十才にして血液循環の原力を發見し六十二才にして呼

吸及び其結果と題する書を著はし六十五才にして天文學の一書を著わせしと云ふ焉ぞ怪まん朝に五千の女生徒を教授して夕に男子の敎師が教師とあり五十八才の霜を戴きて八千哩外へ旅ひ立ち到る所に女生徒を訓陶し學校を改良せしを余は信ず六十七才の老の身が怒濤激波を凌ぎて大陸に渡り徒歩してフランス、スウヰッツルランド、ジヨルマニー、ベルヂオムの山川を跋渉せしを嗚呼盛なる哉ウヰルラルド夫人嗚呼榮ある哉ウヰルラルド夫人而して今夫人の元氣とあり動機となりし原を推して夫人が身のクリスチアンたるを負ひて神の婢たるの務をあさんと欲する精神に在るを見ば夫人が大業と其榮名は豈只吾人が女子教育の卒先者と稱するのみに止まらんや。

寄書

本號には紙面塡塞したれば此の欄を略す

●新報

○唱歌

婦人社會の此頃の流行は第一に唱歌なり爲居君は三ケ月にて御婦人方を黨となし九段坂の唱歌會は半年にて之をホト、ギスと爲すべし而して此他に尙ほ女子唱歌校を計畫するものあるを聞く他年之が爲めに好し玲朗の音を聞くを得ずとも切めては人前にグヂ〳〵グド〳〵と云ふ貴婦人なきに至らんか然し其迄の間だ至る處ろに鼓うぐひすの稽古を聞くは隨分の耳ざわり也。

○雜誌

第二に尤も感謝すべき流行は婦人會の雜誌發行なり曩に婦人衛生會の雜誌を得たり今また僧侶社會の義力に成る婦人教會の雜誌を得たり而して來月より亦た婦人矯風會の雜誌を見んとす希はくは更らにいよ〳〵流行せよ。

○美術

世間近來の流行にて到る處ろに八釜しく𠮟立るは美術の事なり而して本領の御婦人方に於て頓と其の評判なきは少し間が拔たり吾人はそろ〳〵之を論じたく思ふもの也。

○税所敎子　正七位税所敎子は去月廿四日從六位に叙せらる

○美術展覽會　日本美術協會にては來る四月十日より二十日間上野公園櫻ケ岡にて美術展覽會を開かるゝ由

○感化慈善會　同會は今度新に設立することとなりしが其創立委員總代は名村泰藏吉川泰二郎岡本武雄、會計監督は三野村利助近藤廉平、創立事務員は德田多助の諸氏なりと

○家庭教育の相談　麹町區富士見町の公立富士見小學校校長教員等は家庭教育の大に學校教育に關係あるを以て成るべく密接に聯絡し內外相待つて教育の進步を計らんとて去月廿五日は生徒の母姉を招き家庭の教育上は勿論其平常家居の摸樣などを逐一質問し又教員の意見をも吐露して向後の事を相談し尙ほ又不日に更らに父兄を招きて同樣相談をなす筈なりと

○傳學校　府下二三の有志者は各區內の神社佛閣等へ日々集合する子もり女に筆算裁縫等を敎ゆることを企だて第一番に本所回向院境內に傳學校を設立せんとて出願の運びになりしとのことなり

○生徒募集　東京府レース敎場にては生徒廿五名を募集せらる

○英國女子裁縫會　の會主はミス、ダウバン氏にて火土兩曜日に麹町區下二番町卅八番地女範學校を會場として開らくものなり

○東京女學　同校は生徒增加し手狹に付校舍を增し建てせらるゝよし而して今回更らに速成裁縫科を設け半年にて卒業せしめらるゝ由なり

○新古美術展覽會　石川縣下には曾て東京に設けありし前龍池會の如きものありて專ら美術上奬勵の爲め蓮池會と云ふを設けたりしが右は同縣下有志者の結合より成立ちたるものにて今度美術を一層奬勵する爲め同縣特產物なる陶銅漆器の三品類の美術を進步せしめんと同縣博物舘を借り受け來る四月十日より三週間右三品其他の美術品の展覽會を開設すると云ふ

○福島師範學校女子部　同女子部は本年始じめて設置せられ本月男女生徒共募集せらるゝ筈なりしが女子部は創立の際萬事不整頓なれば一時其募集を見合すと云ふ

○女子英語學校　埼玉縣下大宮高等小學校長山田懿太郎氏は同地へ今般女子英語學校を設立せんため教師雇入れに周旋中なりと云ふ

○紫溟會の女子教育　熊本の紫溟會にては基督教の宣教師男女十餘人が同地に入りて女學會婦人會抔を起し女子教育に着手せしを見て其機關新聞を以て頻りに佛

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

教者に向ひ女子教育に着手せんとを勸告し居しが今般同派の學校なる濟々黌に女子部を設け自ら其勞を取る由なり

○女教員養成所　福岡縣にては女教員養成所を師範學校内に設け當分の内廿名を定員とし養成になる趣なり

○松山婦人慈善會　は去月二日同地にて其發會を開らきたり趣意へ專ら戰人軍人の傷痍疾病を救護する方法を學び兼て慈善博愛の道を講習し婦人の智德を修養するにありと云ふ故に會員たるものは虛儀を廢し協力友愛を旨として衣服裝飾は家居のまゝにて出席すべしとのとなり

○婦人懇會　去る十二日佐賀高木町願正寺にて婦人懇會と名つけ婦人方が打寄り智德を進むるの趣意にて其の第一會を開かれしと

○ウイルミナ女學校　去八日の夜大阪川口の外國人居留地に於て罹災せしウイルミナ女學校は追つて新築するまでは西區京町堀町五丁目私立有英學館に移さる

○婦人談話會　越後三島郡與板町にては此程より婦人談話會を起さんとの計畫ありて種々相談の上毎月十一日を以て開會するとに定め去る十一日其第一會を開きたりと

○愛友會　京都木屋町三條上る愛友會は京都高等女學校レース科教員戸田某氏の昨年設立にして專ら婦人にレースの教授をなし居る由

○婦人救世會　越後長岡の中村仙殿氏が會長、星野辰子が副會長にて今度婦人救世會といふを設立せり同會は婦女をして精神の快樂を得せしむるを目的とし會場を觀光院町二十四番地と定め毎月十八日を開會定日とし會日には授讀(觀音經)教話、講義(觀音經)問答(關經中の疑義の生せし處)頂禮の式をなすとにて會員は勿論婦人に限り會費は人々の適宜にし餘財あるときは郵便局へ預け置き弘通費或は慈善費に使用すると云ふ

○秩父婦人會　埼玉縣秩父郡大宮鄉の松本荻江子外十數名の婦人が發起にて今度同地に秩父婦人會なるものを創設し毎月一回以上相會して教育、衞生、家政經濟、普通禮式、女子手藝の五科を講習する筈なりと云ふ

●海外女事

○米國女大學　たるウエルスレー大學の數學教授ヘレン、シエーフエル孃は此度同校の校長に撰ばれたり故に當學期の終りに至り現校長アリス、フリーマン氏の退職を襲がるべし

○英國女友會　世界にて女の會の尤も大ひなるものは即ち英國にある女友會(ゲールス、フレンドリー、ソサイエチー)なり之は二三十年前に初めて出來たるものにて今は會員一百五十萬人あり會頭は即ち　女王ビクトリア陛下にして會の目的は教會の婦女子互に協和し年少の娘兒をして相ひ助けて淸よきに進ませ生涯を潔ぎよくして兩親に從順に長上に信實ならしむるに在りとぞ而して此會は當今米國にも其勢力を及ぼし現今すでに六部百二十四支部九百八十二人の働き手六百三十三人の名譽會員三千八百五十八人の會員一千〇六人の申込準備人あるほどなりとぞ

○馬島禁妾令　馬島(亞非利加)半官報は此頃同島女王の發布せられたる蓄妾禁制の令を公にせり其本文左の如し(二月廿八日官報)

目今馬島人の蓄妾を禁止す若し犯すものは五十「ピヤストル」の罪金に處す又馬島人にして外國人を妾となすときは其蓄妾の法令發布以前もしくは其以後に在るに關せず凡そ馬島臣民の名義を以て所有する所の財產は其何れより得たるに論なく悉く之を官に沒入すべし而して其蓄妾より生じたる兒子は馬島臣民なるべし

○日本婦人慈善會　桑港に於て一月廿一日の夜在留日本婦人慈善會の發會を福音會にて開らきたり當日來會者は日本人二百名米國婦人數名にて藤井領事にも夫人と共に來りて演說を爲し其他數名の演說祝辭等あり後汁粉の馳走ありテーブルに向ひて珈琲茶碗にスプーン附きの汁粉は隨分風變りなりしが米國婦人の中にて數碗のお代りを爲し給仕の日本婦人をして驚かしめたるもありしは餘程旨かりしものと見へたり同會の目的は當港在留の日本婦人にして病氣其他の不幸に罹るものを助くるに在りて毎月一回つゝ開會する積りなりと(二月廿五日毎日新聞)

○女子の學位　英國カムブリッヂ大學にはニウハム、ギルトン等の部校ありて實際女子にも男子同樣の高等教育は施し乍ら卒業后たゞ證書の如きものを與ふる計りにて學位を與ふるとなかりしに付き之を不都合とし均しく學位を與ふるやうに致したく其旨を議員に申出さんとて同志者の賛成を募り其の記名調印を求るよし女王雜誌は專ら其事に盡力して其の賛成者の姓名等は每號掲載し來るとにて此件は嘗ても本誌當欄内に記しをきたるとなるが此頃の米國の女學雜誌を見るに云く此の學位授與賛成者に記名したるものは最早五百人以上あり其内四十人は公立學校の女長なり二百十一人は同じく公立學校の次女長なり四十二人は教授及講師なりと

○子供のはなし　(第四回)

忠義の家來二人　(其二)

お祖父さんは一人の黑太郎丈でさへ大層のお仕合せであるのに夫から又た行き〳〵てトある山に至られまするとや矢張り躰の大きな美しひ色の白ろひ女が一人居つて黑太郎を見て會釋しながらお前さんはモウ旦那のお伴をなさるノうれしひとチ―どうか私の身の上をもお願ひ申して下さいとの事ゆえ黑太

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

郎はお祖父さんの前に手をついて彼處に居りまするは私の從妹で之れも亦た多年あなた樣のお出でをお待ち申したので御座いますか彼れは御覽の通り大層に足が長う御座いますから女ながらも道を歩るくとが餘程上手で若しあなたが何處かへお出でに成たしと仰しやれば乍ちま肩に掛け申して幾百里の路を瞬たく間に參りますどうかあれをお使ひ下すつて私同樣に何なりお命付を願ひたう御座います夫にまたお給金の事並びに食物万端の入費は是又私同樣一切頂戴いたしませず只だ何も自分で賄ひを致しホンノお使ひさへ下されば有りがたいので御座いますと申ました。一人でさへ大層に自由が利くと云つて喜んでお出でなすつたとですからお祖父さんは早速に御承知なすつて之からは彼の黒太郎と今一人の女は顔が白ひからお白と名をつけて此のお白と二人の忠義な家來を連れて倘々諸國を巡歷なすつたそうですが、眞に重寶なとには御膳でも御召でも時々の宿屋でも皆な黒太郎が用意をして呉れて其の上嵐山の櫻が今比さかりであらうと仰しやればお白は直ちに二三日で其處へお祖父さんをお連れ申し又今比ろは田毎の月が定めし美しからうと思ふ比は又すぐとお連れ申すと云ふ有樣で眞に幸ひなとでありました、坊や孃達はさぞかし此樣な忠義なお家來が欲しひでせうが此間だも申した通り之は決してお祖父さま計りにお附き申すものではなくお前がたにも矢張此の二人づゝのお家來があるのですよ。

先づ彼の土地と云ふ黒ひお家來を御覽一粒の種を播けば二三十粒の米が出來るのみか花を咲かせて心を喜ばせ果實を結ぶ木を生長させてお前方に味の能い梨子や葡萄を食べさせ又た綿が生へて衣服の料となつたり材木が出來て家を造るとが出來ませうが夫でも此の土地はお前方より給料も貰はず食物も貰はないでせう、其上又た彼の水と云ふ白ろひお家來はイクラでもお前方の望み次第にお給仕をするのみか之に舟を浮べさへすれば一日一夜で京大坂までも參られませう而して矢張少しもお前方から給金も扶持も貰らひますまい。左すればお前方にも皆なあの黒太郎やお白と同樣な忠義な家來がありますので祖父樣と均しく仕合せの事ではありませんか、ダカラ能く之を有がたく思つて決して土や水をひどく使つては成りませぬ、又た土や水でさへ斯樣に温和しくして正直にお前方に使はるゝのですからお前方は一層温和しくして人の言ふとを聞き又たとひ何んな自分の利益にならないとても人のお爲になるとならば身を粉にしてでも働かねばなりませぬよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

特別廣告

東京婦人矯風會録事（一月分殘）

一、一月四日會頭矢島楫氏加藤登志串田茂ノ兩氏橫須賀ニ遊説セリ二泊シテ集リヲ催シ好結果ナリ歸途橫濱ニ寄リ又集セリ

一、二月四日午後二時ヨリ中六番町櫻井女學校矢島姉宅ニテ議員會ヲ開雪降ニ付來會者少數出會スル十名

矢島楫。加藤登志。元良米。古市靜。荻野吟。小崎千代。串田茂。本多孝。潮田千世。佐々城豐壽

議題

一、雜誌發行ノ件

本會雜誌編輯委員ニ荻野吟、島田かしノ二姉ヲ會頭ヨリ指命ス兩人直ニ辭シテ受ズ

一、雜誌發行之上會員ニハ無定價ニテ配布スベキヿ　荻野吟發議

右ハ脩正シテ定價ノ半額ヲ以テ會員ニ配布スルニ決ス

一、議事躰裁改正之件　佐々城豐壽發議

以後議員中發議セント欲スル者ハ議案ヲ前以テ會頭或ハ書記ニ届置議員會一周間前ニ届カザル分ハ次會ニ議スルモノトス

一、第二土曜日定期會ヲ今川小路美以美敎會ニテ開クヿ

一、矯風會ト禁酒會ト名稱ヲ分離スベキ件禁荻野吟發議

右ハ廢案

一、東部有志集金地方遊説費トシテ金貳拾圓ヲ本部へ寄附ス

一、本會ヨリ布哇國駐在日本總領事安藤太郎へ向ケ書狀幷酒之害五部勸告文三部ヲ送ル其文ハ略ス

二月十一日午後二時ヨリ神田今川小路美以美敎會ニ於テ定期會ヲ開ク

一讃美

主會　矢島楫

一祈禱　淺井佐久

一開會趣意　矢島楫

一各部會ノ報道　西、小崎千代　南、井深せき　東、潮田千世　北、古市靜

一讃美

一會計報道　竹尾古登

一雜誌編輯委員撰擧ノ件

一諸縣へ派出委員ノ件

一本會ノ事務所建築費募集ノ景況報道　潮田千世　串田茂

一勸話　加藤登志

一同　飯田雄太郎

一祈禱　矢島楫

一記録報道　佐々城豐壽

一勸話一言　同

記録報道ノ順序ヲ亂セシハ書記ノ出會至極遲刻セシニヨル

右ハ小兒病氣ノ故ナリ

一讃美

集會人凡百二十人午後五時閉會

本日定期開會中左ノ二氏頭書ノ主意ヲ演ブ本會ハ固ヨリ各自ノ營利ヲ問答セン爲ノ會ニ非レバ稍躰裁ヲ損スルニ似タリ故今之ヲ末尾ニ記ス

一、自己ノ裁縫敎所ヲ立ンカ爲ニ贊成ヲ乞フ云々ヲ述　平戸玉夫

一、矯風會ノ趣意ヲ問フ主會矢島氏當日ハ質問ノ爲ニ辨スル時ニ非レバ之ヲ謝絶ス　橫濱聖經女學校　稻垣女史

二月廿四日會頭幷串田茂兩姉熊谷婦人會ノ招待ニ應ジ至ル當地集會摸樣頗ル盛大ニテ一回ニ百人或ハ二百人集ル後日望ミアルベシ

一高知縣々會議員植木氏ヱ向ケ禮狀幷規則書勸告文若干枚ヲ送ル

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

廣告

○鈴木弘恭大人著述○小中村淸矩大人評

改正增補 **文法口授** 全一册●一名和文獨案內 定價十八錢 郵稅四錢

此書は文章家なる鈴木大人か多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて曩に出版したる所大に諸校の賞用を得たれば尙亦今般大人に乞ひ改正增補して古人の文章數十篇を卷尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校敎科用の書籍に適當也とて成立學舍女子部跡見女學校及び頌榮女學校並に明治女學校長榮女塾等の敎科書となりたり

統計局次長世良太一君序○統計協會議員吳文聰君序
通今居士橫山雅男君著

●**婚姻論** 定價金三十五錢 郵稅十四錢

此の書は通今居士橫山雅男君の著にして全編を二十八章に頒り總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より說き起し早婚。晚婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國舊來蠻風の結婚を改良すべきの必要を感するの書なり

發兌 東京京橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

發兌	定價	廣告
一月。七日 十四日 廿一日 廿八日 二月。四日 十一日 十八日 廿五日 三月。三日 十日 十七日 廿四日 卅一日 四月。七日 十四日 廿一日 廿八日	一册。五錢 郵稅。一錢（但府內無郵稅） 十册。四十八錢郵稅。十錢（同前） 半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢 一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢	特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載するに右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む 一行 一回 前金拾錢（廿七字詰） 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駸々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄉區元富士町盛春堂○同本鄉區春木町二丁目解明堂○同本鄉四丁目文春堂○橫濱住吉町角田屋良○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彥根西內大工町新々堂○相州小田原綠町石春堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

東京京橋區日吉町八番地
發行所 本局 **女學雜誌社**
編輯兼發行人 巖本善治
印刷 森田豐

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY